

神宮参道にて「人権」を考える

「口ナ禍の中、伊勢神宮に向かった。北海道知事が「札幌着」の旅行の自肃要請をしたころに急遽旅券を取り寄せたが、伊勢神宮に向かつた時は、すでに菅首相が「札幌発」も制限する旨の会見をした後であった。私は、時期は多少ずれているものの、毎年、神棚の角祓をいたぎに伊勢神宮に参拝させていただく。角祓は年内に神棚に納めるものと教えていただき、それからは師走の忙しさがありながらも角祓をいただいてきた。私にどうしては不要不急の旅ではなく、必ず繰り返されてきた行事ともいえる。

内宮に到着して宇治橋を渡り、御手洗場に立ち寄つてから「おとりつぎさん」と呼ばれて親しまれている

瀧祭大神にて名前と住所をしつかりと述べてから正宮に参拝させていた

だく。その後、荒祭宮に参拝させていただき初めて個人的な願いを心中で念じる。宇治橋を渡り切つてからいつものおり砂利道の砂利を一歩一歩踏みしめ、その音を聞きながら前に進む。口ナ禍の中での初めての参拝である。北海道育ちの私にとっては、伊勢神宮の参拝は弁護士になつてから始めたが、20回を

超えて参拝させていただいている。砂利を踏みしめながら、毎年変わりなく参拝させていたしたこと自体への感謝の気持ちを抱きながら歩き、また、自らのこれまでの人生の軌跡を思い浮かべながら歩いていると、1年前の自分、2年前の自分、3年前の自分、その時々の自らの立ち歩く姿が走馬灯のように砂利道の下から跳ね返つてくるようで何とも言えない気持ちになった。参道にそびえたつ樹齢何百年にもなる神宮杉から見ると、私が参拝させていたいたこれまでの年月など、まさに光陰矢の如し、あつという間の出来事にしか過ぎないのであろう。

そのような時間の流れの中、香港の民主活動家である周庭（アグネス・チョウ）ら3名に禁固刑の実刑判決が言い渡された。令和元年6月に香港国家安全維持法の成立とその後の市民の反政府デモに対する弾圧についてはこの「ラムに書き綴った。反政府デモに参加した市民のうち、1万人をこえる市民が逮捕され、個人攻撃のキャンペーンも展開される。情状酌量をした裁判官に対する

司法制度の重要な役割を果たすべき裁判官への圧力が今も続いている。私たちには「人権」というものは人が生まれながらにして有する当然の権利であると教えられてきた。そして、この「人権」という視点から社会内で起きているさまざまな出来事の良し悪しを評価している。特に、私が長年弁護士として携わってきた児童虐待防止活動の視点からは、また、札幌市の子どもの権利条例を制定する検討委員会のメンバーとして、条約の条文を片手に一つひとつの条文を考え続けていた私の立ち位置からすれば、被虐待児やその周辺に立ち尽くす家族のあるべき姿を思い描くとき、「人権」という視点から考察するのが通常であった。しかし、もしakashitara、それは考察方法の一つでしかないのかもしれない。

エヴァル・ノア・ハラリの「サピエンス全史」には、今から7万年前から3万年前にかけてホモ・サピエンスに見られた認知革命のことが記載されている。7万年前ころにサピエンスは新しい言語技能を身につけ、伝説、神々、宗教を生み出し、人々の集合的想像の中にのみ存在する共通の

神話を作り出したという。そして、国家はこれら共通の国民神話を根差して社会秩序を安定化させた。この視点からは司法制度も「人権」もいわば共通の法律的な神話の内容となるかもしれないが、この点、私は

「人権」というものは世界共通の画一的な神話にはなりきっていないのだと思う。昨今の中国の香港や台湾、南シナ海への介入を考えるにあたり、また、ウイグル族を虐殺してきた事実についての評価を行うにあたり、私は、「人権」という視点からの考察のみに安住し、その考察を止めることでは許されない国際社会を生きている。

そういう意味で、マイケル・ビルズベリーの著作である「China 2049年」は示唆に富む書籍であると思ふ。かつて香港返還に携わった鄧小平が思い描いた中国の動きの速さはご本人の想像を超えている。中国という国が、また、中国民族が太平洋戦争が終了した後の1949年から100年をかけ、どのように世界の覇権を勝ち取ろうと計画してきたのかを知るにあたり、多くの示唆を与えてくれる。